17世紀ハルハのチベット仏教
―ジェブツンダムパにまつわる諸問題―

新藤篤史

ハルハ（現モンゴル国の前身）随一の高僧とされるジェブツンダムパの系統は、17世紀に登場してくるハルハの統治者の一人トシェート＝ハーンの息子が「第1世」に認定されたことによりはじまった。8代目の転生者は1911―24年の独立モンゴル国の元首であった。これはジェブツンダムパに対するモンゴル人の尊崇心を示す事例といえる。そして、このように転生する高僧のことをチベット語でトゥルクといい、ジェブツンダムパはハルハで最も崇拝されたトゥルクの一系で、ハルハのチベット仏教を象徴する存在である。

ここでは、17世紀後半のハルハにおけるチベット仏教を考察する一環として、この時期に活躍したジェブツンダムパ1世（1635―1723）に焦点を絞り、『ジェブツンダムパ伝』[1]（以下『伝記』）にあらわれるジェブツンダムパ像を提示していく。

ジェブツンダムパが他地域の史料に登場するのは、1686年のクレーンベルチルの会盟の記事においてかと思われる。当時、ハルハは左右二翼に分れ対立状態にあり、これを調停する目的で、ハンガイ山脈の南面バイダリク河の渓谷にあるクレーンベルチルの地で開かれたのが、件の会盟であった。その頃、中国では1636年に成立した清朝が1661年に即位した康熙帝のもとまさに黄金期を迎えようとしていた。康熙帝は1681年に三藩の乱を解決し、政策の矛先を国外へ向け始めた。当面の相手はロシアであったが、そうした時にハルハの問題が浮上したのである。康熙帝は、このハルハの内乱が内モンゴルに波及し、また北方国境の安全が脅かされることを憂慮した。

クレーンベルチルの会盟に関しては、『親征平定朔漠方略』[2]がその経緯を詳しく伝えている。まとめると、1684年、康熙帝がハルハの者達がダライラマ（5世）を崇拝していることを考慮し、ダライラマに書状を送り、会盟を開くことを提案し、1686年、会盟が開かれた。その時、チベット側からダライラマの名代として、ダライラマの宗派ゲルク派の総本山ガンデン寺の座主が立会人として訪れた。そして、ハルハから会盟の依怙尊として招かれたのが、ジェブツンダムパであった。この会盟でハルハの平和は約束されたが、翌年、西モンゴル・ジュンガルの首長ガルダンから、会盟においてジェブツンダムパとガンデン寺座主が同じ高さの席で会見したことは大いに理に反するものであるとの書状が、清朝とハルハに届き事態は一変する。ハルハの対立は、ガルダンの介入により、ハルハ左翼とジュンガルの構造へ変化した。1688年、ガルダンがハルハ最古のチベット仏教寺院エルデニ・ジョーを攻め、ジェブツンダムパはハルハを逃れ清朝へ亡命することを余儀なくされた。ガルダンは再び清朝に書状を送り、ハルハ侵攻の理由はあくまでジェブツンダムパとトシェート＝ハーンがダライラマに背いたからであるとした。こうしてジェブツンダムパは、ガルダンがハルハを侵攻するうえでの口実になったことで、広く認知されるに至った。後の展開は、ハルハが清朝に帰属したことにより、ジュガルと清朝の対立構造へと拡大していく。

ジェブツンダムパ研究において、ジェブツンダムパがなぜガンデン寺座主に対し師礼を怠ったのかという問題は常に議論の的である。そして、従来の見解の一つは、まずジェブツンダムパがチベット仏教チョナン派ターラナータの転生者であった点があげられ、さらにチョナン派が1650年にダライラマ政権により粛清されたことが述べられる。要するに、ジェブツンダムパにとってダライラマおよびゲルク派は、前世者の宗派を潰した張本人ということになり、ゆえにガンデン寺座主に対し師礼を怠ったということになる。

宮脇淳子氏は、ジェブツンダムパがターラナータの転生者であると認定したのはチベット側ではなく、ハルハ側で、そこから当時のハルハにはゲルク派以外の宗派が普及していたこと、またジェブツンダムパはチョナン派に属していたことを指摘する。[3]また近年の陳慶英氏、金成修氏の研究では、ガルダンの前世者ウェンサ＝トゥルクがジェブツンダムパの出家の戒師であった点こそ重要であるとする。つまり、ガルダンにとってジェブツンダムパは前世においては弟子にあたり、それがガンデン寺座主と対等に会したことは許し難い行為ということになる。[4]

ただ、これらの説明には、転生を余りに重視し過ぎている点や宗派に対する根本的な誤解があり、ジェブツンダムパの実像は顧みられず、もはやジェブツンダムパはガルダンのハルハ侵攻を裏付ける要素でしかないように思われる。『伝記』を紐解き、チベット仏教に則してジェブツンダムパを見た時、先行研究のジェブツンダムパ像と『伝記』のジェブツンダムパ像の相違点は明らかである。

チベット語版『伝記』は、ジェブツンダムパの弟子のザヤパンディタが著した。成

立は18世紀初期とされ、幾つか存在する『伝記』の中で最も古くて重要であるとされる。そして、踏まえなければならないのは、ジェブツンダムパはターラナータの転生者であると認定されてはいるが、それを根拠に、ジェブツンダムパをチョナン派の僧とすることはできないということである。誰がどの宗派に属しているかを決めるのは、対象がどの寺に属し、誰を師としていたかが重要で、『伝記』を見る限り、ジェブツンダムパがチョナン派の寺に属してチョナン派の僧を師とした形跡はない。

『伝記』から抽出した経歴では、ジェブツンダムパの師は悉くゲルク派の僧で、ジェブツンダムパが幼少時よりゲルク派流の教育を施されていたことが分かる。同時に、ジェブツンダムパが一修行僧とは思えない待遇をチベット側から受けていた様子が、チベット留学時の多くの寺の出迎えやハルハへ戻る際のお供の数などから窺える。またこの時、ジェブツンダムパはゲルク派の創始者ツォンカパの師の寺の座主にもつけられている。

これらの待遇は、ジェブツンダムパがトシェート＝ハーン家の人間であったことに関係があるかと思われる。当時、ゲルク派は自身の宗派を広めるため、モンゴルの有力王侯と「施主と応供」の関係を結び、その王侯家をモンゴル地域における布教活動の拠点と定めていた。その一環として、チベット側はモンゴル王侯の子の中から高僧のトゥルクを選定していた。とくにジェブツンダムパはチベット留学の期間が二年と短いことも優遇の一つかと思われ、その影響からか、ここで『伝記』におけるジェブツンダムパの高僧としての資質が問題になってくるのである。例えば、それはジェブツンダムパが灌頂を行わなかった点にも示され、ザヤパンディタの記述は、この灌頂を行わなかったジェブツンダムパの正当化に終始している。さらに『伝記』に限れば、ジェブツンダムパのターラナータの転生者としてのダライラマへの思いは、きわめて友好的なものとして記されている。

以上から、ジェブツンダムパがトシェート＝ハーン家の人間で、それゆえチベット側から特別な待遇を受けていたことにより、いわゆる高僧としての資質に問題があるのではないかということはここで提起できるかもしれない。勿論、それらを１６８６年のクレーンベルチルの会盟におけるジェブツンダムパがガンデン寺座主に対し師礼を怠ったことの理由にすることはできない。ただ、従来のジェブツンダムパ研究が、クレーンベルチルの会盟における師礼問題の答えとしてあげている、ジェブツンダムパがターラナータの転生者であり、それゆえジェブツンダムパはチョナン派の僧で、そのチョナン派がダライラマ政権により粛清された、という筋立てに対しては再考の余地があることは指摘できるであろう。

註

(1)『ジェブツンダムパ伝』blo bzang 'phrin las, dza ya paṆḍita（1642-1708）. *sh'a kya'i bsun pa blo bzang 'phrin las kyi zab pa dang rgya che ba'i dam pa'i chos kyi thob yig gsal ba'i me long*. 1702. Reproduced in the Collected Works of Jaya paṆḍita blo bzang 'phrin las. ŚATA-PIṬAKA SERIES, vol.281. New Delhi.

(2)『親征平定朔漠方略』（四庫全書３５４、上海古籍出版社、１９８—）

(3)宮脇淳子「ジェブツンダンバ一世伝説の成立——十七世紀ハルハ・モンゴルの清朝帰属に関連して——」（『東洋学報』74巻3・4号、１９９３）

(4)陳慶英／金成修「喀爾喀部哲布尊丹巴活佛転生的起源新探」（青海民族学院学報・社会科学版、第29巻第3期　２００３）

（大学院文学研究科博士前期課程史学専攻）